

2 番目のキス

2006(平成18)年9月6日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督=ピーター・ファレリー、ボビー・ファレリー／脚本=ローウェル・ガンツ、ババルー・マンデル／原作=ニック・ホーンビー『ぼくのプレミアライフ』(新潮文庫刊)／出演=ドリュー・バリモア／ジミー・ファロン／レニー・クラーク／アイオン・スカイ／ケイディー・ストリックランド／マリッサ・ジャレット・ウィノカー(東京テアトル配給／2005年アメリカ映画／103分)

……2004年のア・リーグは、ヤンキース3連勝後のレッドソックス4連勝で松井秀喜が泣いたが、その後の86年ぶりのワールド・シリーズ制覇も含めて、レッドソックスファンは大喜び……。そんな歴史的な年に照準を当てた『FEVER PITCH』(05年)が、『2番目のキス』という邦題で日本に登場。仕事中毒で勝ち組志向のキャリアウーマンと、トラキチの高校教師との恋愛はうまくいくの? と考えれば、それは多分ムリ……。意外に(?)快活でセンスの良い彼に、それまでの「3K」の彼女たちとは違う魅力を見出したヒロインだったが、恋模様の展開は予想どおりに決裂……。さてそこで、レッドソックスの奇蹟と同じような、奇蹟の逆転満塁ホームランは出るのでろうか……?

邦題も原題も大正解!

この映画の邦題『2番目のキス』は、『25年目のキス』(99年)、『おまけつき新婚生活』(03年)や『50回目のファースト・キス』(04年)で、このところ「ラブコメの新女王」となった感のあるドリュー・バリモアが主演するこのロマンティック・コメディ映画の「本質」に着目してつけたもの。すなわち、そのココロは、「どうして私へのキスが1番ではないの……?」という女性の不満を意味シんに表現したもの。この映画では、ヒロインのお相手の1番目のキスの相手は4月から10月の限定ながら、ボストン・レッドソックスなのだ。よりわかりやすく言え

ば、要するにトラキチの彼氏を持った場合、「阪神タイガースと私とどっちが大事なの?」というジレンマに陥るのと同じようなもの。そして、そんな質問に対するトラキチの彼氏の答えはきっと「……」だろうから、それはあなたの心を傷つけるもの……? これに対して、原題の『FEVER PITCH』はアメリカ的でもっと単純であるうえ、女性の視点からではなく、男の視点から見たもの。つまり、これは「激しい興奮状態」という意味で、野球にもサッカーにもいる熱狂的ファンが生み出すあの異様な状態のこと。この映画は、この原題も大正解だが、日本女性向けにアレンジした邦題も大正解!

大前提は2004年の大奇蹟!

阪神タイガースが1985年、掛布、バース、岡田のクリーンナップを擁してリーグ優勝そして日本一に輝いたことは団塊世代の私たちは生々しく記憶している。しかし、それから20年近く優勝から見放され、ダメ虎ぶりが定着していた阪神タイガースが、2003年星野タイガースによってリーグ優勝を果たしたことは、多くの若者たちもよく知っているとおり。

ところが、アメリカ大リーグのボストン・レッドソックスは、1920年にベーブ・ルースをニューヨーク・ヤンキースに譲り渡した後、「バンビーノの呪い」にかかってしまった。その結果、ニューヨーク・ヤンキースは1923年から26回もワールド・チャンピオンに輝く常勝チームに転じたのに対し、レッドソックスはリーグ優勝こそ1946年、1967年、1975年、1986年と4回したものの、2004年まで86年間もワールド・シリーズの優勝から見放されるという悲哀を味わっていた。

他方、日本人の目で見れば、読売巨人軍の松井秀喜がニューヨーク・ヤンキースに移籍したのが2003年。イチローと同じように1年目から順調に実力を発揮した松井は、2004年にも順調な成績を残し、常勝軍団ヤンキースはアメリカンリーグの優勝決定戦において、レッドソックスと対戦した。そして、ヤンキースはいきなり3連勝。これによって沸いたのは、ニューヨークのヤンキースファンばかりではなく、日本も同じだった。ところが、レッドソックスファンに大奇蹟をプレゼントしたのは、その後のレッドソックスによる4連勝。日本でもかつては、1958年の西鉄による、対巨人3連敗後の4連勝。そして、1989年の近鉄 VS 巨人

戦で「巨人はロッチェよりも弱い」と言われた巨人が発奮して、奇蹟の3連敗後の4連勝を成し遂げた事例はあるが、ア・リーグではそんな奇蹟は100年ぶり。

この映画は、単なるロマンティック・コメディ(?)だが、そのラブコメぶりをホントに楽しむためには、この2004年のレッドソックスの大奇蹟を知っていることが大前提! そこで、もし恋愛経験は豊富でも野球オンチのあなたなら、まずはそのお勉強から……。

この映画に関してはプロダクションノートも必読!

プレスシートには必ず「プロダクションノート」がつきものだが、この映画のそれは必読! なぜなら、3連敗後の4連勝という奇蹟が現実起こったため、何と映画用に完成されていた脚本を変更しなければならなくなったという内情が、そこに生々しく紹介されているから。もちろん、元々の脚本が気に入らなかったというのであれば話は別だが、そんなことが現実の映画づくりにおいてありうるはずはなく、旧脚本は「誰もが気に入りに、誰もが変更を加えたくないと思っていた」もの。そうであるにもかかわらず、私が今日観たこの映画は、物語の本質を変えることなく、新脚本にもとづいてつくられたもの……。さて、そうなる書き改められたという旧脚本は、一体どんな内容だったのだろうか……。プロダクションノートを読めば明らかになるが、それは是非皆さん自身の目で……。

サッカーから野球に乗り換えたが……?

この映画の原作は、ニック・ホーンビィの『ぼくのプレミアライフ』(新潮文庫刊)とされているが、プレスシートのスタッフ紹介では、ニックは原案兼エグゼクティブ・プロデューサーと記載されている。それを読むと、ニックはイギリスの若者たちの間で絶大な人気を誇るベストセラー作家らしいが、作家になる前はベンと同じく教師をしており、イングランド・プレミアリーグのサッカーチーム、アーセナルの熱狂的なサポーターだったとのこと。

そして、この映画の脚本を書いたローウェル・ガンツとババルー・マンデルは、この原作を原案として採用したうえ、ドリュー・バリモアをメインとしたラブコメに仕上げた。また、プレスシートを読めば、まずこの脚本に注目したの

がドリュー・バリモアとドリューの製作会社である「フラワー・フィルムズ」、そして、脚本を読むなり電話に飛びついたのが、監督のファレリー兄弟とのこと。たしかに、一流企業のエリートビジネスウーマンのリンジーと、レッドソックスの熱狂的なファンである教師ベンとの間で展開されるラブストーリーは、多くの女性ファンの共感を呼ぶものであるうえ、それが100年に1度の奇蹟を背景としているだけによけいドラマチックなものになっている。そう考えると、ひょっとしてこのパターンなら、再び野球をサッカーに移し、そして舞台をアメリカから日本や韓国に移してリメイクしても大ヒットする可能性があるのでは……？

いるいる、こんなオンナ……

この映画のヒロイン、リンジー・ミークス（ドリュー・バリモア）は、スクリーン上からは何の仕事をしているのか具体的にわからないが、プレスシートによると成功したビジネス・コンサルタントとのこと。そう言われてもよくわからないが、リンジーが勤めているのは大手企業のように、競争も激しそう。しかし、リンジーは完全な仕事中毒（ワーカホリック）人間であるうえ、本人はそんな自分に自信満々で、次の出世のための仕事をバリバリとこなしていた。もっとも、静かに自分を振り返ってみると、未だに独身で年齢は既に30歳を過ぎているから「結婚」という二文字のプレッシャーを否定することはできない様子……。

そんな、仕事と恋愛に揺れ動く女心のサマ（？）は、リンジーの友人のモリー（アイオン・スカイ）、ロビン（ケイディー・ストリックランド）、サラ（マリッサ・ジャレット・ウイノカー）との会話内容を聞けばよくわかる。当然のように、リンジーがこれまでつき合ってきた男はたくさんいるが、それは同タイプの「勝ち組」の男ばかりだから、多分本質的に合うワケがないもの……。いるいる、こんなオンナ、日本にも……。しかし、アメリカにはこんな女がゴロゴロ……？

魅力的な高校教師はどんなタイプ……？

こんなリンジーと、東ボストン高校で幾何学の教師をしているベン・ライトマン（ジミー・ファロン）が知り合ったのは、ベンが校外学習のために数人の生徒を連れてリンジーのオフィスを訪問したため。しがない（？）高校教師とイケて

るビジネスウーマンとは生きる世界が正反対だが、生徒たちがはやし立てるのに猛発奮したベンは、いきなりリンジーに対してデートを申し込むことに……。

当惑するリンジーだったが、ユーモアのセンスに溢れ、初デートの大失敗をやさしくフォローしてくれたベンに対して、今までつき合ってきた男たちとは全く異質の男の姿を見出したリンジーは、次第にベンに惹かれていくことに……。

ラブラブ状態に陰りが……

リンジーにとって、仕事から完全に離れてリラックスできるベンとの交際ははじめての経験だが、それはきわめて居心地のいいものだった。また、ベンにとっても美人であるうえ頭がよく、何ゴトにも反応が早く、何をしても明るく楽しい気持になれるリンジーは理想の女性。そんな2人のラブラブ状態は急速に進行していったが、これにさまざまな角度から疑問点や不安点を指摘するのがリンジーの3人の親友たち。当然そこにはリンジーの幸せを願う気持とともに、嫉妬や妬み等々も……。そんな友人たちの「心配」をモノともせず、ベンとの交際を深めていったリンジーだったが、雪解けの季節を迎え、球春がスタートすると、ラブラブ状態にも少しずつ陰りが……。その第1は、学校が春休みの間、故郷のボルチモアへ一緒に行こうというリンジーの誘いを、ベンが断ったこと。一体それはなぜ……。？ その理由は、レッドソックスのキャンプ見学のため、フロリダへ行くのがベンの年中行事だったためだが……。

仕事とサポーターの両立は……。？

4月に入るといよいよトラキチならぬ熱狂的レッドソックスファン、ベンの生活は野球一色に染まっていたのは当然。にわかレッドソックスファンになったリンジーも、レッドソックスの本を買い込み、その快進撃を共に喜んでいたが……。

高校教師のベンには仕事とサポーターの両立は可能（？）でも、日夜ビジネスの世界で競争にさらされているキャリアウーマンのリンジーには、基本的に無理……。？ パソコンを球場に持ち込んでまでその両立を図ったリンジーだったが、ある日そんなリンジーの頭にファールボールが命中したことを契機として、リンジーは球場通いをギブアップし、仕事を優先させる旨を宣言。ここで、2人の間

に明らかな衝突が……？

結婚すべきか否か……それが問題だ！

2人の衝突が決定的となったのは、レッドソックスが優勝に向けてラストスパートをかけてきた9月。週末にパリに出張するチャンスができたことを喜び、一緒に行こうと誘うリンジーに対して、ベンがまず見たのは予定表。そして、その答えは「マリナーズ戦があるので行けない」ということ。さて、その意味するものは……？ さらに、この時リンジーはひょっとして妊娠……？ という状態にあったため、リンジーにとってここは、結婚すべきか否かを考える、人生の大きな岐路。ベンの答えによって大きく心を傷つけられたリンジーは、それを自分の意思でしっかり決断することを余儀なくされることに……。

人生は常に二者択一……？

あれほどいつも一緒にいたリンジーを失ったベンのほやきを聞き、「2人とも悪くないよ。それが人生だよ」というマセた人生訓をベンにたれる生徒もいたが、ベンは失ったものの大きさに茫然自失……。そんな気分では、せっかく球場に来ても、レッドソックスが勝っても、今までと同じように喜べないのは当然。そこで、ベンが下した決断は……？ リンジーのようにレッドソックスはベンの思いに答えてくれるの？ というのがベンにとって究極のクエスチョンだったようで、そこまで気持が整理できればあとは一直線。もっとも、本人はそれでいいとしても、問題はお相手のリンジー。人生は往々にして1度タイミングが狂ってしまうと、その後もなかなかうまくいかないもの……？

リンジーの二者択一は……？

ベンが久しぶりにリンジーの部屋を訪れると、そこにはリンジーを前々から狙っていた(?)会社の同僚たちが……。一瞬新しいボーイフレンドかと疑うベンに対して、リンジーはそうではないと否定したうえ、ベンがリンジーの心をひどく傷つけたこと、そしてベンにとってレッドソックスが1番である以上、ベンとの結婚は無理だという結論をはっきりと……。

ベンは自分の過ちを認め、もう1度やり直したいと宣言したが、リンジーは、それは冬のシーズンだけで、また来年4月になれば同じだと答え、ついに部屋のドアは閉じられてしまった……。

ここからの逆転満塁ホームランは……？

以上で2人の半年間にわたる濃密な交際はジ・エンド、となるのが通常の恋愛パターンだが、それでは観客とりわけ女性客を熱狂させるラブコメは成り立たない。まして、2004年にレッドソックスは86年ぶりの奇蹟を生み出したのだから、ベンとリンジーの恋愛にも奇蹟の逆転満塁ホームランがあるのだろうか……？

そう思っていると、間の悪いことに、リンジーにあれほど願っていた昇進と、すぐにあいさつのために入社せよといううれしい知らせが届いた。同僚や先輩たちの祝福を受けてうれしそうにスピーチするリンジー。これによって、彼女のビジネスウーマンとしての人生はさらに進化・確立するはずだったが……。

愛とは？ 自己犠牲とは……？

そんな中、ベンはいつもの年間指定席に座り、レッドソックスの試合を観戦していたが、今日は周りの友人たちから責められており、何か異様な雰囲気……？ それは、ベンが命と同じくらいに大切にしていたレッドソックスの年間指定席を、今日を限りにリンジーの会社の同僚に売り渡すという話を進めているため。ベンのこのような行動が、リンジーとの関係においてどこまで意味があるのかの評価は難しいところだが、少なくともこれがベンにとって最大の自己犠牲の姿であることは明らか。そしてそれは、イエス・キリストが人間への愛のために自ら十字架の犠牲となった姿とダブるもの……？

そんなニュースを聞いたリンジーは、果たしてベンのためにどんな自己犠牲を……？ さあここから、逆転満塁ホームランに向かっての劇的な歩みが始まっていくから、ご注目を……。とりわけ、脚本を変更してまで球場内で撮影した映像は、奇蹟に近い貴重なもの……？

そして映画終了後は、愛とは？ 自己犠牲とは？ についても、じっくりと考えてみては……？

2006（平成18）年9月7日記